添田　馨

詩集　波間いま、時一九七三――一九八三

添田　馨

詩集　波間いま、時一九七三――一九八三

林道舎

著者略歴
添田馨（そえだ・かおる）
1955年10月，仙台市に生る。
慶応義塾大学文学部卒。
在学中に「塾生三田文学」及び
「第七次三田詩人」に参加。
評論に「60年代詩の検証」があり，現在も執筆中。
詩誌「海蝕」主宰。

詩集　波間いま、時一九七三――一九八三

昭和五十九年四月十五日初版発行
定価　二、〇〇〇円
©　著　者　添田　馨
発行者　加藤　利明
発行所　林　道　舎
埼玉県上尾市緑丘三―七―三
〒362 振替東京九―二一八〇八
電　〇四八七―七一―五〇五四
印刷　三協鈴木印刷
製本　辻本製本所

波間の十年について

ひとつの波が去り、次の波がまだやってこない谷間のような時代があると思う。どんなにあがき背伸びしてもその谷間としての停滞をのり越えられない時代が。過去はあまりに貧しく、現在は崩れ去っており、未来とても険しい道のりが見えるばかりというとき、しかしまったく別次元の地平をひらくものが私にもあった。

ここに集められた作品はすでに過去に属するものだが、それを一冊に編んだことの裏には作品成立時の個別事情とは別のまったく違う意図があった。もしこれら作品群にある時代を通したドラマチックな意味をあえて読もうとするなら、それは都市においてその生活基盤を解体された存在が、どのような径路からその失ったすべてを恢復しようとし、そして失敗したかということに尽きよう。だが幸運なことに作品は言葉であって、すでに私個人の言表ではない。稚拙ながら私にとって一作々々が方法的あるいは思想的な実験と価値

の探究を目指していたのもまた意識された事実である。とるに足らぬような言葉でも、その時々において現にそれは私の生を支えたし、つまりは何らかの価値中心として私に機能し得たものだったと言えるのだ。そしてそれがたまたま私の詩において実現されたということは、すなわち不特定多数のわれわれに開かれて顕在化したのだというふうに考えたい。そうでなければ作品を公開すること自体に意味は認められないからだ。

いま改めてこの十年間を飛び石のように渡ってきたこれら作品群をなぞる時、あるゆるやかな曲線を描く、いままで視えなかった時代の本質的な裂目がほの視えたような幻惑にかられ詩集とした。いやむしろこの本は詩集というより、ある詩歴の復元として企図された。十年という時間的累積の諸相を断面化したいというように触発されたものである。そしてその底流にこの波間の時代の不特定多数の声がかすかにでも聴き取れたらとかすかに祈るものである。

一九八三年十二月三日　　著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

詩集

波間いま、時一九七三――一九八三

目

次

波間の十年について

Ⅰ　**樹の時代**　一九七三――一九七六

樹の時代　3

讃歌　7

少年　18

Ⅱ　**黙域から**　一九七三――一九七六

黙域　23

ママンの街　31

涸河　34

Ⅲ　**心臓によせる歌**　一九七六――一九七八

唄　41

二十歳　44

それ　49

生活　52

枯葉　56

プログラム・一九七六　59

心臓によせる歌　68
絶望を告げる鳥は……　74
反恋唄　76
岸辺　84
Ⅳ　冬から　冬　一九七八――一九八三
蔓草　93
幻叢　95
冬から　冬　98
日蝕　100

むしろ遅すぎる回顧に……（羽田　功）

I

樹の時代

一九七三——一九七六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

樹の時代

(For introduction)

風のしんぞうの鼓動にひっぱたかれて
血族の土地の地下水脈から樹に生まれたったぼくは
ぼくの円環のなかでふき飛ばされる街々の
区画から区画へ衿元をひろげる青の次元の高みをかっぽする
くるくる回転する風の子供たちの頭から頭へ
ふかく喰いこんでいく青空の肺はぼくの
しんぞうの蛆に歌われた樹の恋をぬりこめる一番高い場所にある部屋だ
そこでは原油から生まれたまっくろい霊たちの
空をエナメルのブルーにぬりかえる工場地帯が
ざらざらした季節の皮膚のうえにもうひとつ灰の土地を浮きあげる
根　ぼくの火の血統を保証する根はしかし
なにもおしゃべりできぬだろう　眼を噴火さす火
火のなかの風ぐるまについて

風のしんぞうの鼓動にひっぱたかれてぼくが
風のぞくさぬ表の領域のまだ媒体ですらなく
血族のひとりとして土の胎内に分散していた時代には
雨がゆっくり窒素と燐酸を調合し
夢の境界ちかくの墓をほりかえしてはいくつもの火の種子を育てあげた
かれらがじぶんの熱に気づかぬまま地下水のすきまで
ただいたずらに青空の辞書を編纂し　原油を喰って燃えひろがっていたころ
燐酸はいくつかをまっくろい霊に生まれさせたが
いくつかは窒素の土に洗浄されて
ぼくの樹液に溶けこんだ瞳れに上昇した
おお　きみらはみないか　環状の海に血をながしながら
灰の土地に頭を植える陶の若者たち
かれらの焦げついて回転しない風ぐるまを

風の子供たちの一年ぶんの嘆息は
ぼくの円環をながい期間くらくする

眼のなかで火がどんな青空を喰べる力もうしない
灰の土地をますます肥やして頭脳のキャベツを収穫するため
表の領域からやってくる者たちがいて
泥の足で大地をみしらぬ地形に造成した
しかしどうして樹の恋は青い肉の街にひろがることができたろう
部屋をあけ放したまま風のしんぞうの鼓動にひっぱたかれ
けれども花を咲かせはじめる陶の若者たちに火を譲っちゃいけない
子供たちの頭を噛みつぶして
とびちる言葉をかれらは掻きあつめ逆に犯されてしまう
飢えた泥と血の井戸に青空をさかさにうつし
くらい環状の時間で季節の鉄道を運転しながら

そして樹ははげしく皮を剝がれるのだ
部屋　恋をぬりこめた部屋で工場地帯は増殖し
蛆は風の使節をよそおって地形を測りながら
あわただしく樹の恋の体系を組みなおす　しかし異物の石に封されて

街の女はいつも円環をそとがわから壊しにくる
けれどまだぶよぶよで骨のない言葉たちに地図を造らせちゃならない
その街は円環をもたない風の人々の
青い肉を取りひきする商業の体系で完成するから
恋するため樹は肉を無理やりちぎり取っては
女の石を傷口にいくつも埋めこませる
そして肉は沈んだ霜のおりる地方へ行商され
はや起き女房に料理されて労働者たちがそれを喰うだろう
もう樹の血筋は火の血統とおなじじゃないが

風のしんぞうの鼓動にひっぱたかれて
風の土地の住人になろうとして樹は
街角から街角を支配した表の領域をはいまわる
ぼくの円環のちょう点でひらいたままの部屋は
風の動脈を通過する時の電車にゆれながら灰をとばし
恋はふれられなかった樹の童貞時代に

ひとりだけみしらぬ女を石に封じて侵入させた
だからぼくはふしぎな貨幣で家をひとつ建てなきゃならぬ
恋の体系とずれている表の法律のまたがる街に
みんな隠れていくだろう　根　その土地で風の子供たち
きみらだけが生きのびるんだ　かわらぬ血統の火のなかで
風ぐるまをもいちど回しだすため破れた円環
涸れない風のしんぞうを時の電車にめぐらせるため

讃歌

ぼくはみたような気がする
眼と顔が重ならないまま
息が影法師の踊りのなかに漂ってた頃
みたこともない天国
南の空をうろつきまわり
雲の上にいくつも太陽を吐きながら

灰色のスボンはいた大入道の
層なす空のいちばん奥から吹かれてきて
（誰が送ってくれたのだろう）
笑う眼をむすうに散らす海
二本の胡桃の木のまわりに
ガラス色の柵を垂らした
ぼくはみたような気がする
乾いた石のかすかな歌声を反射して
草の広間に座ってたしろい犬
「ナポ！ナポ！」
無花果のあかい内臓と
乳をにじませる藪のへり
かたむく屋根の破れ目に
風音だけの保母さんが燕の巣をよびいれ
（呼んでいたのは　動いていたのは
　誰の空気の蛇だったか）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.